

或る視線

UN CERTAIN REGARD



JEAN-FRANÇOIS
JONVELLE

ジャンーフランソワ ジョンヴェル











よって異なるにしても（そしてそれが現代的な表現だと彼らの写真を勘違いさせるめくらしただけで）、私たちは繰り返して繰り返し、いったい何人の美少女たちの形の良いや尻、濡れた髪、訴えかけるような眼差し、扇情的なポーズ、もの憂げな表情を見せられてきたことだろう。十年一日、こうした写真家たちの作品に表される女性観は見事なまでに変わらない。写真家は自分の好みにあった美少女たちを自分の《芸術》のミューズ、インスピレーションの在りかとして、探し選択し写し、そして写真の中に置き去って、次なる美少女を探す。その繰り返し。

ジョンヴェルが女性のエスプリ、女性のタイプと言った時、彼が意味するところは写真に明白に表されている。彼が「僕は自然で素直な女の子が好きだ」と言った時、自然で素直な女の子は髪が濡れていて、厚化粧などしていないのだろう。髪がばさばさで厚化粧で朝の光りに包まれていない中年女性でも、自然で素直な女はいくらでもいる。けれど彼の30年間に及ぶ写真には、そうした少女はいくらでも存在しても、そうではない成熟した《女》は存在しない。なぜって、彼の辞書によれば、そうした《女》は美しくないから。

写真は視覚的なメディアだが、写された写真は被写体となる人や物の外観だけを写すと信じている人は、もはやいないだろう。写真は写す人の意志や思想を如実に反映する。

ジョンヴェルの写真は彼のフアンタジーである。女性の美、イコール、若さ、プロポーション、肌の質感、緩な曲線、美、顔、表情……。ヌード、イコール、



官能的で扇情的、「ソウル」写真……。そういうステレオタイプから一歩も踏み出していない。それに先端的ハイ・ファッションと画像処理が彼の写真に応用されて、彼の写真を観る女の子は「カッコイイ」と思い、男の子は安心して「そそれる」。

彼の写真がファッション写真の範疇で語られている内は、上記したような批判もそれほど当てはまらないのかもしれない。ハイ・ファッションを見せ、カッコイイ雰囲気を作る。そんなことにめくじらを立てることはない。彼の写真に限らず、テレビでも他の媒体でも、日常生活のさまざまな場面で、十年一日の言動や

表現は毎日なされているのだ。それでも確実に、女性の意識も表現も、男性の意識も表現も変化しているし、時代は動いている。そしてファッション雑誌は彼の写真を多く掲載し写真集は良く売れる。それでいいじゃないか、と。

しかし彼の写真がアートとして語られる始めた時、まったく話は違ってくるのだ。コンセプトの上で時代性を欠如した現代アートなどありえるのだろうか。

ジョンヴェルが感性豊かな優れた写真技術を持った写真家であることを否定する人はいないだろう。彼が、まるで呼吸するように写真を撮り、人生を写真に捧げ、写真を愛し、少女を愛し、人生を愛

しているのも、作品を通じて伝わってくる。しかし、それだけで現代アートたるに充分とは言えないのではないか。

彼の写真に限らず、こうした作家の写真展に足を運び、写真集を買うのは、案外、若い女の子が多いと聞く。私には作家本人よりもこうした女の子の方が気がなる。

彼女たちが、「かっこいい」という感覚にとどまらず、その「かっこよさ」のからくりを一步、思いを巡らせてくれたら、と思う。

ジョン・ヴェル (写真家)

編集者の熱意というのは時としてとても罪だ。絶対にやめておこうと誓っていたことさえ簡単に崩れてしまう。こんな私にそこまで熱意をもって依頼されたらどんな原稿でも受けてしまうわ、と誤解すると(実際、原稿依頼の時に編集者が書き手をいかにその気にさせるかは編集者の力量ともいえるもので、一種のペテンだと私は信じている)、あとで怒涛のような後悔が襲ってくるのだ。しかしその後悔の最たる原因は、もちろん私自身である。こんな機会でもなければ意欲的な私は、この作家やこの作家に代表される写真の分野について、積極的に調べたり勉強したり考えたりはしないかもしれない。いい機会じゃないか、というすけべ心である。そして、こういう虫の良い思惑は、あつという間に崩れ去る。目の前には白い原稿用紙の海が延々と続くことになる。私は今まで、興味の持てない写真、積極的に評価できない作家については(薫くんではないけれど)逃げて逃げて逃げてまくってきた。「写真」と一言で言うけれど、その種類も分野も表現方法も意図や使われ方も多種多様にあつて、たとえ写真評論や写真史を「専攻」していたにしても、その全てを網羅することなど不可能だから、準備不足のもの、批判の必要性を確信しているもの以外批判的になりそうな作品については逃げてきた。どんな作品や表現でもそれについての歴史的・社会的観点から解説を加えることはできる。しかし、それ以上の論評についてはその分野の専門家に任すべきで、特に反論するときには評価するよりも周到な用意が必要だろう。逃げて逃げて逃げて逃げるのはその存在を認めた上での一つの手段であつた。

また当然のことだけれど、相矛盾する表現について、同等の評価を与えて論じることが私にはできない。それは私が写真の蒐集家でもマニアでもないからだ。そんなことをしたら、論理的な矛盾に陥ってしまう。だから、ここまでの長い前書きは、用意も周到とは言えずにこれから「反ジョンヴェル」雑論を書く言い訳、「お断り」である。願うべくは、私の「反ジョンヴェル」雑論が、逆説的に彼の作品の魅力を際立たせることになって、ジョンヴェル特集に相応しい体を成すことだ。

ジョンヴェルの写真を観る。写真集を一ページ、一ページ、めくる。顔もスタイルも(美しい)少女たちの写真が続く。多くは肌をあらわに晒している。ソファやベッドに横たわり、川辺で本を読み、着替え、ドライヤーで髪を乾かし、恋人とキスをする。ブライヴエートな場面設定が演出されている。ジョンヴェルの好んで使う中望遠レンズは写真の背景を暈して、少女たちの美しい顔や形の良い胸や尻を強調する。彼女たちは時に挑発的で、時にもの憂げで、時に扇情的で、多くはともりラックスしているように見える。ジョンヴェルの巧みなライティングと構図は、(カッコイイ)少女たちの姿態を、(カッコイイ)写真に写し留める。観ていて別に嫌悪感はない。清涼飲料水のようにさりげなく、(カッコイイ)とさえる。ジョンヴェルがもう長いこと「エル」や「ヴォーグ」、「コスモポリタン」、「マリ・クレール」誌などで活躍する、引っ張りだこの売れっ子ファッション写真家なのも、彼の写真集が売れるわけも分かる。確かにそれだけで、いいじゃないか。

ジョンヴェルは彼の有名な二冊の写真集「ミストレス」「Bonville Big」と現在の制作活動についてインタビューで以下のように答えている。

僕の写真には実際に時代を感じさせるものはないんだ。ここにある写真も25年前のも同じ時代なんだよ。撮る女性のスタイルや彼女たちにさせることは、25年前に写真を撮り始めたときからの一連のものなんだ。それは女性のタイプであり、女性のエスプリであり、身体を曝したりあるいは隠したりすることでもあり、あるいは仕草や視線を通して、何かを強く暗示することだったりする。これが僕にしていることだ。違う時代に撮られたものがある、だけどそんな匂いはあまりしない。続きみたいなものだからね。

また彼は写真集「Bonville Big」の前文「ジャン・フランソワ・ジョンヴェルに関する私的小辞典」のなかで「自然さ」と題して以下のように話している。

私は自然で素直な女の子が好きだ。私に気がいっているのは、例えば少し髪の毛が濡れて乱れている時。デビューした頃の頃は、モデルの前にコップの水を

けて彼女たちがそれに反応するのを撮ったのを覚えている。濃いメイクは大体重苦しいし、女の子を醜くみせるものだ。1トンの口紅をつけている女の子をどうして抱きたいと思うのだろうか？それに雰囲気は女の子の気分に合わせてくなくては。私は恰好つけたものや、けばけばしいもの、つんとすましたものからはつい逃げてしまう。創造するためには本物の雰囲気が必要だ。私は起きたばかりの女の子を包んでいる光が好きだ。ちょっとだけ甘えたような。君達はそうじゃないかい？

ジョンヴェルは実際、非常に正直であけすけな魅力的な人物なのだろう。それは疑われない。そして読者は彼のソフィスティケートされた写真技術やスタイル、一般的に広く通じる美少女への好み、あくまでも抑制され極端に走らずそれでいて程よく官能的な彼の写真を、カッコイイ、美しい、と受け取る。

彼のように正直に告白している写真家は珍しいとしても、この類の写真家の、この《時代性》の欠如には実際、うんざりさせられる。スタイルや手法は時代に

反ジョンヴェル雑論 笠原美智子

ANTI-JONVELLE RANDOM THOUGHTS

ジョンヴェル うん、だけど僕が知られるようになったのは80年代に入ってからのことだ。その前はモードの仕事だけをしてた。それから70年代の終わり近くに自分の写真を撮り始めたんだ。

——その頃にスタイルを確立したのであるか？

ジョンヴェル でもスタイルを確立しようなんて思ったこと全くないよ。全然だね。そう思わずにこんな風になったんだ。プラン、戦略の類は一切持たずにね。繰り返すように、それも自分の生活の一部なんだ。今もなおやっていることと同じ、変っていないんだ。

——では保つていきたいものは？

ジョンヴェル 保ち続けていたいの、きつとそれがいわゆるスタイルなんだろうけど(笑い)二つあるよ。僕の写真が本物であり続けること。それから自身自身に關することではauthentic(スポンタニティ/自発性/天真爛漫さ/自然さ/率直さ/素直さ)を是非とも大切にしていきたいね。それが僕にとって一番重要なことなんだ。

——マン・レイとリー・ミラーの関係をどう見ますか？

ジョンヴェル 写真だけで彼らの私生活については知らないけれど、自分の意見としてどう彼らの関係を見えるかといえば、これらの写真は、まだ今みたいに写真や雑誌テレビなど、至るところにイマージュが溢れる前の時代に撮られた一種の遊び、その二人の間における二人のための、という感想を持つね。そして何よりある種のプレジールをそこに見る。フランス語の「Plaisir」(プレジール/喜び/快楽/楽しみ)という語のように、色々な意味があるよ。彼の写真に溢れる探求の喜び

であると同時に彼ら二人の「Being」に結びついたものなんだ。

——あなたのスタイルとよく比較されますが？

ジョンヴェル 光栄だな、だけどマン・レイってのは本物の神だよ。僕にとって現代の写真を生み出したのは、まさに彼なんだ。もしあの時マン・レイがいなかったら、我々は多くの時間を失っていただろう。それに彼はアメリカ人でありながら、フランスに永く生活し、ここパリで全てのインスピレーションを見つけた。ある意味じゃ、誰よりもフランス人だった。でもバリにいなかったら彼だってあんな写真は撮れなかったかもしれない。

——共感をお持ちですか？

ジョンヴェル 僕が彼はもつとも偉大な写真家の一人だよ。なんて言うか、守護神のような。彼の写真は全部持っているよ。彼は全てを備えていた。本当に色々なことや革新を成し遂げ、豊かな写真を撮った。それも彼がいかに大きな喜びを持って撮っているかを感じさせるような写真の楽しさ、人生のそして女性の歓喜、悦楽。まるでお祭りだよ。うん大きなお祭りだ。

——もしも映画から影響を受けたことがあるなら、ゴッフルよりむしろトリュフォーかな、と思いますか？

ジョンヴェル うん、もちろんそうだよ！ だけど彼ら二人しかいないわけじゃないよ。沢山の映画監督に影響されていると思う、ただ映画が斜陽になってしまふのはあまりにも早かった。

——他の映画監督とは？

ジョンヴェル 例えばフランソワ・ノエル・ムンダ、フリッツ・ラング、今はなき

アメリカのオーソンウェルズとかね。日本にもいい時代があったよね。今はきつと少なくなったのだろうけど。

——クロサワですか？

ジョンヴェル いや、彼だけじゃない。パリでちょっと前に日本映画の連続上映があったんだよ。フランスでもみんな日本映画の事はよく知っているよ。

——では幾つかご覧になったんですか？

ジョンヴェル うん、沢山、強烈だったよ。それに今は多くの映画を放映するテレビがある。ビデオもあるし、それに、さっきいったように今我々の回りには本に沢山のイマージュが溢れているよ。

——その中で僕がしたいのはつまり、自分独特のイマージュを作ることなんだ。世界が女性と密接にかかわりながら移りゆくことでわかるように、世界で一番美しいもの、それは女性なんだ。

——女性を美しいと思う瞬間は？

ジョンヴェル セックスをしたばかりの女性は本当に美しいと思うね。例えばだけど。あと女性のある種の脆弱さが好きだね、朝、目覚めの女性をすばらしく美しいと感じる。化粧も何もなくて、まるでヴァージンのようなじゃないか。

——では美しくなる条件は？

ジョンヴェル うん、でもこれはみんな一緒の事なんだ。だけど女の人を美しくするためには、その女性が自ずから「望まれている」と感じる事なんだ。そうしている女性はとても美しい。彼女には無限の可能性がある。目の前の誰か、もしそこにカメラが介在するとしてもね、その誰かに「美しいと思われている」「彼に望まれている」ということを自覚できるなら、彼女はそこでもっとも奇麗

になれるんだ。

——「Femme Desirable」(欲望をそそぐ女)とはまた、違うのでしょうか？

ジョンヴェル いや、それと近いものもあるよ、そういう面もあるね。全てのことが一つのことのまわりを回っているからね。

——ではそのほかには？

ジョンヴェル まだいるの？ もう充分じゃない？ (笑い) もしも女性のことを語りたいなら何時間かかるよ。幾世紀もの間女性に關し書かれ、描かれ作られてきたものを見れば、世界でもっとも重要なものは女性なんだとわかるだろう。

——そこまでおっしゃる？ (笑い)

ジョンヴェル そりゃそうだよ、女性は世界の全ての国を潤してきたんだ。芸術分野においても、画家、小説家、作曲家、映画監督、すべての芸術家が、限らない靈感をそこから得ている。

——一番美しい創造物ですか？

ジョンヴェル もちろんだよ、美しいのみならず一番強い存在でもある。

——女性がより強いのですか？

ジョンヴェル うん、女性は男性よりも強い。それは明らかだろう？

——なんだか女性の話はかりになってしまいましたね。

ジョンヴェル それがまさしくジョンヴェルの写真の世界なんじゃない？ (笑い) ひたすらに女性を愛して、その美しさに惹かれるままに撮り続けてきた。その写真を美しいと愛してくれる人達がいる。僕はとても幸せな写真家だと思っているよ。

——どうもありがとうございました。

(インタビュアー/テキスト 中井恵美子)

達にさせることは、25年前に写真を撮り始めたときからの一連のものなんだ。それは女性のタイプであり、エスプリであり、軀をさらしたりあるいは隠したりすることでもあり、あるいは仕草や視線をとおして、何かを強く暗示することだったりする。これが僕をしていることだ。違う時代に撮られたものがある、だけどそんな匂いはあまりしない。一種の続きだからね。

— 25年前に写真を撮り始めたのですね？

ジョンヴェル いや、うわあ、25年じゃきかないよ、66年に始めたんだから。

— 60年代ですね、あなたにとっての60年代、そして70年代とは？

ジョンヴェル むずかしいなあ、現在でもモード、音楽、映画や文学の各分野で60年代それに70年代でやってきたことを焼き直しているだろう。これは輪のよ

うな一続きのサイクルなんだ。いうなれば60年代それに70年代には現在よりもずっと多くのインスピレーションを生み出せるものがあつた、と定義できるかな。

— この時代の影響を受けたと思っ

いますか？
ジョンヴェル 多分ね。自分でこの時代の影響を受けた実感はあまりないんだけど。ライフスタイル、女の子達なんかも今の生活と大差ないよ。60年代にはヌー

ヴェルヴァーグがあり、ヒッピーがあつたけど、今だって少しヒッピーっぽいファッションが繰り返されたりしているだろう。影響を受けたとは思わない、しかしむしろこの時代には映画、音楽、絵画、写真、雑誌などにまで及ぶ、非常に強力な芸術的変動があつたと思ってる。とても強い刺激があつたんだ。

— ちょうど当時デビューされてますね？



じることほどすばらしいものはないね。

——結婚したいとは全く思わなかったのですか？

ジョンヴェル うーん、多分1、2度は。でも結婚を望んだのは僕じゃなくてむしろ、一緒にいた女性の方だったな。

ただ結婚することを具体的に考えるとね、僕は毎日同じ事を当り前に繰り返す生活が好きじゃないんだ。男と女がただのカップルでいれば、もっと沢山の事が起こるし、互いを惹きつけあおうとするだけで、もしも正式に結婚してしまったら、そこまですて気がするんだ。だからどんなに好きでも、結婚しようとは思わなかった。たとえそれでうまく行かなくなつたとしてもね、そういうことも現実にも何度もあるけど。(笑い)そうは言っても僕の一番の関心事は常に写真で、女性というののもちろん、それにすごく近い存在なんだけどね。

——Jonville Bis「嫉妬深いから自分の写真に他の男の登場を許せない」とありました、今回男性が写っていますね。

ジョンヴェル ああ、あれはジョークだよ。実際僕はそんなに嫉妬深くないんだ。(笑い)男性をフレームに入れたのは、時に傍観者になりたくなるからなんだ。まるで覗き見をしているようにね。これはすごく刺激的なことなんだ、僕にとつてさ。つまり写真との関係において、しばし女性達は姿を変えらるんだ。道やカフェで出会って、いい雰囲気になって話をしたり、議論を戦わせたりするだろう、そんな普通の女性の多くがカメラを前にするとほとんど違う女になってしまうんだ。写真は女性にとってすごく刺激的な一面があり、女性も露出症的要素

をもっていると思うんだ。それも又、魅力や魅惑を織り成す要素だつてことを、彼女にひとつひとつ納得させていくのが僕なわけだ。

——視線が刺激になるわけですね、被写体の側の視線はどうでしょう？

ジョンヴェル ヌードでないにもかかわらず、その視線のなかにずっと力強いものを見せる写真を撮れることがある。裸の女を見せることはちょっと安易だけど、女性の瞳のなかでおきている何かを見せることは、主観を伝える。或る視線を通してね。これはフアンタスティックだよ。

——インスピレーションの源は？

ジョンヴェル うそ偽りなく、僕の一番大きなインスピレーションの源は、昔からずっと、女性だね。もちろん別のものからイメージを膨らますことはあつて、そんな時はノートに書きつけておくんだけど、モデルを前にすると前もって書いていたことをコロリと忘れてしまうことがあるよ。その女性に特有の人間性から生まれる独特の仕草があるだろう？そうするとその女性が基礎になる。その女性が僕に全てのインスピレーションをもたらすんだ。

——常に美しいイメージを捜しているのですか？

ジョンヴェル僕は全く退屈しない人なんだ。メトロや飛行機に乗っているとき、道を歩いているとき、カフェを飲みに行くとき、いつも観察しているんだ。ポーズとかちょっとした日常的なアイデアをメモする。一人一人がその個性で全く違う立居振舞いをするってことが、一番インスピレーションを与えてくれるね。そこに奇麗だ、と思える仕草を見つけたら、それを追いかける。例えばどこかのカフェに

女の子がいて、地面に何かを落とす、それを拾おうと彼女が身をかがめる、なんてことが写真のアイデアになるんだ。

——それを元に演出するわけですね。

そのほかに文学や音楽などの他の芸術分野からは？

ジョンヴェル 絵画や映画などから、それと本を読みながらアイデアを思いつくこともあるよ。例えばある種の雰囲気とかね。でも道だとかカフェ、電車、飛行機のなか、空港などにヒントになるものを見つけたことが多いね。こういった我々の生活を現実にかたちづくっているもののなかでね。

——撮り始める前にモデルとの会話を大切にしているとか？

ジョンヴェル うん、モデルと話して、コンタクトをもつことはとても大事だね。たとえフランス語が通じないとしても、1日前には会っておいて、撮影が始まるときには、全てが落ち着いていることが必要なんだ、気を楽にできるようにね。モデルが気持ちよく安心して撮影することはすごく重要なことだよ。

——話しているうちに欲情するなんてこともあるのでしょうか？

ジョンヴェル 相手によるよ。二人で話すことが、何かしら僕の欲情をそそぐこともあるだろう。うん、偽善者になっちゃいけない。写真を撮る対象の女性に欲情するというのは、さらにすごく大きなことだと思うよ。現実にもそういうことはある。二人が何もしない、何もおこらないとしてもね。それがさらにいい場合もある、多分僕だけが興奮して彼女が知らないことがあるかもしれないし、彼女が気づいて、それを話すこともある。そして美しい物語が生まれることもある。

——撮影の外で、ですよ？

ジョンヴェル もちろん！ちょっとしたディナーとかね。日々の生活の普通の出来事だよ。でもこの仕事をしていく中で「夢」が大きな要素を占めているんだ。

モデルが僕を欲情させ、意志の疎通を感じたらそれを口に出せるときもあるよ、かなり頻りにね。さもないければ言わないで、僕一人の胸に秘めておくよ。

——この特集で扱った写真などから「ジョンヴェルの現在」をどう定義しますか？

ジョンヴェル 今回の19枚にしても僕がやっている全てのことが同じ方向に向いている。Mistress, Jonville Bisと同じエスプリを持った写真だ。僕自身の、うーん、この言葉は嫌いだ。僕自身の、実際僕自身の独自の「Fantasme」(フアンタスム/幻影)である、違ったタイプやスタイルの女性が混ざっている。僕のフアンタスムと言ったって洋服の着方であったり、何かをすることであったり、視線であったり、あるいは顔の一部を見せたり、見せなかったりという、ごくごく単純なものだろう。だからこの写真も、僕が毎日やってたり見たりする全てのこと、現実の生活のなかで、気に入っていること、全ての脈絡の通った必然的な結果なんだよ。

——そうですか。でも既刊のMistress, Jonville Bisに対し、まだ批評のされていないこれらの作品に、ご自身のコメントをいただけますか？

ジョンヴェル そうだね、自分というのはおこがましいけど、僕の写真には実際に時代を感じさせるものはないんだ。ここにある写真も25年前のそれと同じ時代なんだよ。撮る女性のスタイルや彼女

——この特集のセレクトションについて。ジャン・フランソワ ジョンヴェル（以下ジョンヴェルとする）この雑誌のために特に意識して、日本で未発売のものを選んだよ。

——ありがとうございます。この写真は全て最近のものでしょうか？

ジョンヴェル 最新のものと、幾つかはもう少し古いもの、5年前とか、10年前のものもあるかも知れない。

——そうですか？全てとても新鮮に見えます。

ジョンヴェル 初めて見たからそう感じるのは自然だよ。そろそろ発表したいと思っていた写真をこの機会に選んだんだ。そう、ある種のエスプリを持つ写真は歳をとらないことを見せたいと思ったんだ。

——「生」と「性」を作品作りの中でどのように考えていますか？

ジョンヴェル 写真を撮ること、女性を愛することが、僕の人生のほとんどを占めているからね。分けて考えることの出来るものじゃないんだ。写真を撮り始めたときから、被写体として自分の前にいる女性に、強く惹きつけられ魅せられることが僕には必要なんだ。美しい写真を撮るためにね。知性的な引力さえ感じさせる肉体的な魅力、その女性に魅了されてしまうこと。本人も意識していないかも知れないし、気づいていないかも知れないけど、全ての女性が違う魅力を持っている。それを強く愛すること、自分のシネマを作ることが必要なんだ。目の前の女性を本気で愛するためにね。そう



やってすばらしい写真を撮ることが出来るんだ。たとえプロフェッショナルなモデルだとしても、自分が撮ろうとする女性を、機械のように捉えたくはないんだ。何よりもまず人間でなければならぬ。そして僕は、どんな女性を愛するようになっている、僕はその点、恵まれているね。（笑い）

——プライベートな女性関係は？
ジョンヴェル 私生活ね、ずっと前から

僕の人生は女性のまわりを回っているからな。（笑い）もしも女性なしの生活をしていたら、あるいは一枚も写真を撮らずにいたかもしれないね。結構若いときから女性とつきあい始めた。

——結婚は？

ジョンヴェル いや、全く。僕はひとり身だし、いままで結婚したこともないし、子供もいない、はずだよ。まあ、ある日突然、「パパ」って子供が訪ねて来るかも

しれないけど。（笑い）

——一緒に暮らしていた女性をモデルに写真を撮り始めたという話を聞きますが？

ジョンヴェル うん、女性と1、2年生活を共にした事は何回もあるね。その女性達の多くを撮りたいと思った。でもそのほかに、話をしただけの女性達のなかにも、一緒にいて感じがいいと思って、写真を撮りたいと思った女性はいく。確かに僕の私生活と、写真を撮るといいう事は強く結びついている。だから僕にはいわゆる仕事をしているという感覚はないんだ。なにしろ、写真を撮る時、本当に幸せなんだよ。女性との間に魅惑を感じ

















